

モード3 科学を検討する

Kang Kiwon

大阪大学大学院人間科学研究科

本発表では、知識生産のモード論(以下、モード論)の諸概念に踏まえ、E.Carayannis & D.Campbell が提唱したモード3 の概念を、科学の営みという脈絡から検討する。

モード論は M.Gibbons らが考案して以来、さまざまな批判に直面した。もともと、Gibbons らが認めたように緻密な理論ではなく、執筆中、著者らの時間的余裕もなかったと思われるところもあり、結局、粗削りのまま世に出されている。しかし、議論の土台としては可用性があるという評価があり、諸外国を含み日本の研究においてもモード論が引用されることは珍しくない。また、上述した批判は主にモード2 の概念へ集中しているが、Gibbons らは後に Re-Thinking Science (H.Nowothy ほか 2001) にて批判を受容しつつ「新たな概念」を導入することでモード2 の概念を補完しようとする試みが見受けられる。しかし残念ながら、今のところモード論が引用される場合は「新たな概念」を組み入れたモード論ではなく、1994 年の初期概念として用いられる傾向が顕著である。

モード1 とモード2 の区分には研究の脈絡が重視される点に比べ、Carayannis & Campbell のモード3 は Carayannis のシステム理論に基づき、アクターの関係性が要となる。これは従来のモード論とは異質さがあり、先行研究にあたる H.Etzkowitz & L.Leydesdorff によって開発されたモデルと概念に基づいている。しかし、Etzkowitz & Leydesdorff の提案は既存のモード論への批判的性格があったため、批判を受け入れ「新たな概念」が組み込まれたモード論は、Etzkowitz & Leydesdorff の概念の延長線上にある Carayannis & Campbell の概念とは対置することになりかねない。従来のモード論が「新たな概念」を組み入れることによって、分類における脈絡のさらなる細分化を行っているからだ。

市民が研究へ参加する頻度が増えてきた今日の科学に、多様なアクターの参加を考慮にいたした新たなモード(モード3) の概念は確かに議論に値すると考えられる。しかし、上記を考慮すると Carayannis & Campbell のモード3 は社会に適用できると判断するには、まだまだ検討の余地がある。というのも、モード1 もモード2 も多様なアクターがかかわることが可能という点から、脈絡でモードを振り分ける従来のモード論に説得力がある点も否めないからだ。とはいえ「新たな概念」を組み入れたモード論に対する言及も、モード3 自体の言及も稀である点から、結論を下すには、まだ機が熟しているとは思えない。現状を踏まえて、今回の発表をモード論の新たな可能性を示唆し、より活発な議論を引き起こすきっかけとしたいと考えている。